

★身挺産増ンパイサなるす忘★

★ヨルの部★(十二日より晝夜の狂言を入替へて御覽に入れ申候)

御所櫻堀川夜討

辨慶上使の段

竹本大隅太夫
鶴澤清八

人形役割

辨慶上使の段
吉田常次

卿 侍 妻 腰 女
從 元 房 藏
の 太 花 しの ぶ
君 郎 井 ぶ
吉田玉徳
吉田小兵吉
桐竹紋司
桐竹龜松
吉田玉助

極彩色娘扇

永代濱の段
豊竹富太夫
鶴澤友平

天王寺村兵助内の段
豊竹古靱太夫
鶴澤清六

増井の段
竹本住太夫
竹本濱太夫

朝日奈藤兵衛 竹本住太夫
寺子屋兵助 竹本濱太夫
女房お松 豊竹宮太夫
棹筆松 豊竹松島太夫
手代段八 豊竹富太夫
眼兵衛 豊竹富太夫
野澤錦 系

★お客様へ特にお願ひ申上ます

物資不足の折柄、洵に恐れ入りますが、
お下駄履のお客様は、晴雨に不拘なる
べく上草履を御持参下さいませ、様特に
お願ひ申上げます
尚、靴草履のお客様はそのまゝ入場し
て頂きますので至極便利でございます

人形役割

永代濱の段

朝日奈藤兵衛 吉田玉助
お鶴 桐竹紋太郎
お幸 吉田小兵吉
松助 吉田榮三
仕大 吉田龜夫

天王寺村兵助内の段

女房お松 吉田文五郎
お牧 吉田龜夫
筆松 桐竹政龜
眼兵衛 桐竹政龜
若手八助 吉田榮三
寺子屋兵助 吉田榮三
手代子 大田玉徳
習い者 大田玉徳

増井の段

寺子屋兵助 吉田榮三
筆子松 吉田龜夫
朝日奈藤兵衛 吉田玉徳
手代八助 吉田文五郎
女房お松 吉田文五郎
兄弟 桐竹政龜

鷓山古跡松

中將姫雪責の段

竹本伊達太夫
豊澤仙系
鶴澤寛弘

人形役割

中將姫雪責の段

岩大 根御前 吉田光造
中將 廣次 吉田榮三郎
下内 次 吉田兵次郎
下内 次 吉田榮三郎
桐舟 内 吉田多三郎
浮舟 内 桐竹紋司
成公 宅 桐竹政龜

御鑑賞の好伴 繪本番附 は (場内賣店及入口に於て) 一部 五十金

お俊 近頃河原達引

四條河原の段 竹本濱 太夫
野澤錦 糸夫

横淵宮左衛門 吉田玉徳
廻しの久八 桐竹紋昇
井筒屋傳兵衛 吉田光造

堀川猿廻しの段 豊竹古靱太夫
ツレ鶴澤清友 門六

與次郎 桐竹紋太郎
兄弟子 おつる 桐竹紋三司
辰 與次郎 吉田榮三
井筒屋傳兵衛 吉田文五郎
吉田光造

壇浦兜軍記

阿古屋 竹本伊達太夫

重忠 竹本七三太夫
岩永 竹本濱太夫
榛澤 豊竹松島太夫
ツレ野澤綱三 造

秩父庄司重忠 吉田玉助
岩永左衛門 吉田藤一
阿古屋 吉田榮三郎
水水水 吉田常次
水水水 吉田駒三郎
水 吉田龜勢

一部御観劇料

一等 二圓五十錢
二等 一圓五十錢
三等 九十九錢
椅子席 (各税別)

八月廿二日より六日間限り

晝十二時半、夜五時開幕

世界に誇る古典藝術の精華

文樂座人形浄瑠璃總引越し

晝夜二部興行 狂言二日目替り

(お目見得狂言)

八千代劇場週報

神戶 湊川神社前

八千代劇場

昭和十九年八月廿二日印刷發行・編輯發行・主筆阿部・原研所 神戶八千代劇場・印刷人・カネ印刷會社

畫の部

菅原傳授手習鑑

寺入の段

豊竹司大夫
豊澤新三郎

松王首實檢の段

竹本相生大夫
野澤吉五郎

いろは送りの段

竹本南部大夫
鶴澤寛治郎

女房千代

桐竹紋十郎

武部源藏

桐竹龜松

女房戸混

吉田榮三郎

下男生助

吉田多三郎

菅秀才

桐竹小紋

澁れ

吉田萬次郎

御子

桐竹紋太郎

一子小太郎

吉田光次

春藤玄蕃

吉田玉徳

舍人松王丸

吉町玉助

習子

大ぜい

百姓

大ぜい

伊賀越道中双六

沼津里の段

竹本住太夫
鶴澤重三郎

平作内の段

竹本大隅大夫
鶴澤清八
超号野澤錦糸

親 平作 吉田玉助
吳服屋 重兵衛 吉田光造
荷物 安兵衛 吉田兵次
娘 お米 桐竹紋司
池添 孫八 桐竹紋昇

京鹿子娘道成寺

竹本南部大夫
竹本雛太夫
竹竹宮太夫
豊竹司大夫
鶴澤清二郎
野澤吉五郎
野澤錦三郎
豊澤新三郎
鶴澤重造

白拍子 花子 桐竹紋十郎
珍念坊 桐竹龜松
雲念坊 吉田光造
好念坊 吉田玉徳
才念坊 吉田玉市

夜の部

彦山権現誓助劔

毛谷村六助住家の段

勿豊竹呂太夫
鶴澤友衛門

毛谷村六助 吉田玉助
母お幸 吉田多三郎
伴彌三松 桐竹小紋
斧右衛門 吉田玉市
杓藤吉 吉田常次
柳京助 吉田藤一
娘お園 桐竹龜松
非人 大ぜい

八月の入秋蛸瑠璃



ぶんらと
産

八月の人の形淨瑠璃

— 演出總形人・線味三・夫太 —

(夜の部)

鷗山古

跡松
中將姫雪責の段

極彩色

娘扇
永代演の段
天王寺村兵助内の段
増井の段

御所櫻堀川夜討

辨慶上使の段

★十二日より晝夜の狂言入替上演致します★

(晝の部)

一釣舟三婦
七九郎兵衛箱

夏祭浪花鑑

三婦内の段
長町裏の段

妹背山婦女庭訓

道行戀の小田巻
金段の段

卅三間堂棟由來

平太郎住家の段

昭和十九年八月一日初日

初日 晝十一時・夜四時二部
毎日 晝十二時・夜五時 開演

● 一部料金 ●

一等席 五圓

二等席 二圓四十錢

三等席 八圓十錢

(各等入場稅共)

一等御座席は五日前より
一等椅子席は五日前より

前賣切符發賣致し居ります

前賣切符專用電話

南 ⑦四七一一番

一般御用の電話

南 ⑦三〇三八番
三七八八番

妹脊山婦女庭訓

道行戀の小田卷

橋おみわ
求女
姫
女
桐竹紋司
吉田榮三郎
桐竹紋十郎

金殿の段

竹本南部太夫
鶴澤寛治郎

竹本重太夫
竹本司太夫
竹本七三太夫
竹本五三太夫
竹本相生太夫
豊竹呂太夫
豊澤廣助
野澤吉五郎
野澤友衛門
野澤吉三郎
鶴澤友三郎
鶴澤吉三郎
豊澤新三郎
豊澤友三郎
野澤吉三郎
野澤新三郎



妹脊山婦女庭訓

道行戀の小田卷の段
金殿の段

古く幸若舞曲の「大職冠」を承け、操淨瑠璃に藤原鎌足と蘇我入鹿大臣のこゝを仕組んだものに正徳元年竹本座上演の大近松作「大職冠」寛保三年四月、竹本座上演の竹田出雲作「入鹿大臣皇都諍」があり、これに暗示を受けて作られたのがこの「妹脊山婦女庭訓」全五段で、作者は近松半二、松田げく、榮善平、近松東南に後見として三好松洛が名を列れ、明和八年正月、竹本座上演された。大和方面に古來有名な説

話傳説を活用し巧妙複雑な技巧の極致を見せてゐる。

求女の風雅な姿に戀焦れて入鹿の妹婿姫は執心である。杉酒屋の娘お三輪も求女を淡海さしらす戀慕ひ、求女もにくからず思つてゐる。しかし求女は入鹿の持つ寶劍を奪取らんが爲めに婿姫の裾へ緒環の糸をつけるがお三輪はまた思ふ男の求女に緒環の糸をつけて互に心さきめかし戀の緒環をたぐりたぐつて三笠山入鹿の金殿へと後をつけて行く、求女のあさを追ふて来たお三輪は金殿のあたりへ辿りつき今宵こゝのお姫さまと尋れてゐる男との婚禮があるを聞かれ、氣も心も宙に奥殿へ入らふさするさ鑢七が現れてお三輪を斬る。鑢七の金五郎は身の素性を云ひ聞かせ入鹿を殺さうと忍び入つたが、折角笛は手に入りながら躰ぐ生血がないため困つてゐた處、お前に逢て本望が遂げられる、それもお前の思ふ戀男求女の實は鎌足公の長子淡海様のためになる事だと聞かされ、かゝる高貴のお方と假にも契つた身の幸せを思つて死んで行く。

お豆 官官官官
 腐の御用
 (實は 金輪五郎) 七女女女女

桐竹 桐竹 吉田 吉田 吉田 吉田 吉田
 紋十 龜次 萬次 藤次 藤次 藤次 藤次
 郎松 郎次 郎次 郎次 郎次 郎次 郎次

夏祭浪花鑑

三婦内の段

口豊竹 口豊竹 口豊竹 口豊竹
 豊澤新 豊澤新 豊澤新 豊澤新
 三太郎 三太郎 三太郎 三太郎
 鶴澤綱 鶴澤綱 鶴澤綱 鶴澤綱

女傾 女傾 女傾 女傾 女傾 女傾 女傾
 房城 房城 房城 房城 房城 房城 房城
 お琴 磯之 磯之 磯之 磯之 磯之 磯之
 次浦 丞丞 丞丞 丞丞 丞丞 丞丞 丞丞
 吉田 吉田 吉田 吉田 吉田 吉田 吉田
 小紋 小紋 小紋 小紋 小紋 小紋 小紋
 兵衛 兵衛 兵衛 兵衛 兵衛 兵衛 兵衛
 衛衛 衛衛 衛衛 衛衛 衛衛 衛衛 衛衛
 七九 七九 七九 七九 七九 七九 七九
 かか かか かか かか かか かか かか



夏祭浪花鑑

三婦内の段
 長町裏の段

この淨瑠璃は延享二年七月竹本座に上演されたもので三婦内の段は六段目で大體の筋は元禄十一年歌舞伎座に演じられた「宿無團七」を藍本としたものであります。

泉州濱田の家中玉島兵大夫の息子磯之丞が

乳守の遊女琴浦に夢中になつて勘當になり、團七が世話をする。團七は兵大夫と同家中の大鳥佐賀右衛門の家來に傷を負はせた爲に相手双共入牢の身となつたのを兵大夫の扱ひで出牢した恩義からであります。磯之丞は團七の世話で道具屋へ手代に住込むと主人の娘と戀に落ち番頭の嫉妬仲買彌七の殺害、團七の女房お梶の父義平次の騙りから起る引負等の爲に大阪にも居られなくなり死なうさしたのを釣舟の三婦に助けられ其家に匿まはれてゐる處へ一寸徳兵衛の女房のお辰が訪れて來たので三婦は之を頼んで備中玉島へ落してやり琴浦も後から遣らふさしてゐるさ、豫て琴浦に戀慕してゐる大鳥佐賀右衛門に頼まれ團七の舅、義平次が團七の名を騙つて琴浦を奪取る。後で之を知つた團七は舅の後を追つて取り戻さうと馳け出す。これ迄が三婦の段で長町裏へ追ひ付いた團七がそこで欺して義平次から琴浦の乗つてゐる駕を取り戻し其金の経緯から遂に義平次を殺すといふのが長町裏の段になつてゐます。

長町裏の段

團七九郎兵衛

(竹本相生太夫)

三河屋義平次

(豊竹呂太夫)

三河屋義平次

吉田玉徳

團七九郎兵衛

吉田玉助

駕り踊り子

大い

卅三間堂棟由來

平太郎住家の段

竹本相生太夫
豊竹呂太夫
野澤吉五郎
豊竹吉五郎
野澤友衛門

女房 お柳 桐竹紋十郎
横會根 平太郎 吉田光造
みどり丸 吉田龜夫
平太郎の母 吉田小兵吉
進野藏人 桐竹政龜
水やり人足 大い



卅三間堂棟由來

平太郎住家の段

京都卅三間堂棟由來を題材とした淨瑠璃の古いものには、宇治加賀掾の語物「熊野權現」山本河内掾作「都三十三間堂棟由來」或は別に「熊野權現開帳並平太郎奇瑞物語」などがある。後、此等の古淨瑠璃を藍本として、寶曆十年十二月、豊竹座で興行の若竹笛射、中村阿契合作の「三十三間堂平太郎縁起祇園女御九重錦」全五段が生れ、其三段目が今日行はれる卅三間堂の直接原據となつたものである。

北面の武士横會根光當の一子平太郎は、父の仇を報ぜんものと、五年以前からこの紀の

國に來て住んでゐた。或る時、熊野山中で、鷹狩に來た季仲の一行が、鷹の足尾が柳の木にかゝつたのでこの木を伐らうとした。その時來合した平太郎は、弓を射て鷹の足尾を斷ち柳の難を救ふた。この柳の精はその恩に感じて女人となり、平太郎の妻となつて一子緑丸を生み、幸福な月日を送つてゐた。

その頃、京都で高貴の方が御惱みになつてゐたが、神の御告げで、その御前身たる高僧の髑髏が柳の元に埋まつてゐるのを取り出し、その柳の大木を棟木として卅三間堂建立せば忽ち平癒するさあつたので、愈々この柳を伐り取るこゝになつた——是に於て、お柳は平太郎や緑丸と別ればならなくなつた。お柳は平太郎や緑丸が嬖に就いたのを幸に我身のゆかりをかこち離別を告げて去らうとした。平太郎は夢幻にこれを聞き、起き上つてこれを引き留めた。老母も緑丸も共に起き出て來てお柳にすがつた。お柳も別れが悲しかった。折から風に連れ、柳を伐り倒す音が聞えて來る。今はさてお柳は髑髏を夫に渡し「これを手柄に再び出世をなし給へ」と呼びはりつつ姿を消してしまふ。

平太郎は緑丸をつれて今一度、柳の木に對面して最後の別れに急いで行く——。

夜の部

御所櫻堀川夜討

辨慶上使の段

竹本大隅大夫

編澤清 八

卿 の 君 吉田常次
 侍 從 大 郎 吉田玉徳
 妻 花の井 吉田小兵吉
 腰 元 しのぶ 桐竹紋司
 女 房 おわさ 桐竹龜松
 武藏坊 辨慶 吉田玉助



御所櫻堀川夜討

辨慶上使の段

元文二年一月竹本座に上場された文耕堂三好松洛の合作になり、全五段ものでこの「辨慶上使」は第三段目に當る。平家物語、義経記を素材として義経、辨慶、伊勢三郎、靜、土佐坊、等々を点出活躍させ、多くの史實傳説を織込んだ作者苦心の作である。

ここは侍從大郎の館である。この侍從大郎と云ふのは平朝臣時忠卿の執權職で、妻花の

井は時忠の姫君で今は義経公の北の方の卿の君の乳人である。卿の君は義経公の胤を宿して懐胎中なので、保養を兼ねてこの侍從大郎の館で假居をして居るのである。

丁度、義経は平家を滅して堀川御所に飛ぶ鳥も落す勢ひであつた。義経の兄頼朝は生來疑ひ深い質で、義経が平家方の娘と結婚したのが若しや自分に謀叛でも起す下心からではないかと思ふを感じその申し開きには卿の君の首を打つて差出せとの難題を云ひかける。そしてこの侍從大郎の館へその首を受取りに

武藏坊辨慶を寄越すことになつた。

卿の君は太郎の妻花の井、腰元しのぶや久し振りで訪れて來たその母親おわさを中に大勢の腰元共々打ち興じてゐた折、辨慶がこの館へ現はれたのである。

そして何か重大な要件でもあるのか、辨慶は太郎夫婦共々奥の間へ——。續いて卿の君腰元共も、後にはおわさとしのぶが懐しげに親子相逢ふ歡びに浸つてゐた。

しばらくして、浮かぬ様子の侍從大郎と妻花の井が現はれ、おわさに向ひ今日の辨慶が

天王寺村兵助内の段

豊竹古鞆太夫
編澤清 六

女房 お牧 吉田文五郎
 悴 筆松 吉田龜夫
 兄 眼兵衛 桐竹政龜
 寺子屋 兵助 吉田榮三
 手代 段八 吉田玉徳
 若 い者 大ぜい
 手習 子 大ぜい



極彩色娘扇

鞆永代濱の段
天王寺村兵助内の段
増井の段



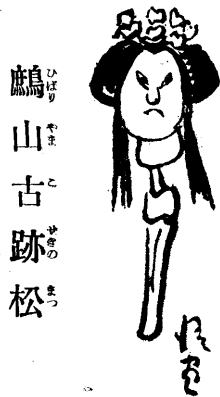
これは近松半二、三好松洛、北窓後一、竹本三郎兵衛等の合作になる浄瑠璃で、初演は寶曆十年七月の大阪竹本座であります。お夏清十郎の世界に朝日奈藤兵衛と喧嘩屋五郎衛門の出入をからませたもので、一人の清十郎

増井の段

朝日奈藤兵衛	竹本住	太夫
寺子屋兵助	竹本濱	太夫
女房	お牧	豊竹宮
筆	松	太夫
手代	段	八豊竹松島
兄	眼兵衛	豊竹富太夫
		野澤錦
		糸
寺子屋	兵助	吉田榮三
筆	松	吉田龜夫
朝日奈	藤兵衛	吉田玉助
手代	段	八吉田玉徳
女房	お牧	吉田文五郎
兄	眼兵衛	桐竹政龜

へ、五郎衛門はお夏、藤兵衛はお品さいふ娘を添はせやうとするのが喧嘩の因になつてゐる。藤兵衛はその主筋に當るお品を苦界から救ふ爲に五十兩の金子調達に苦心する。母の妙林は繼子の藤兵衛に義理を立て、養子にやつた實子の兵助に金の才覺を頼む。寺子屋を開いてその日を暮す兵助は、盲目の上に血痰を病み、藥代に差支へる身の上、女房お牧はわざと兵助から去り狀を取つて番頭段八の妾となり、五十兩の金子を置いて行つた。兵助はその金を早速義兄の藤兵衛に渡さうと出かける途中、安居天神坂で癪が起り苦しんで居る所を通りかゝつたのは兄の藤兵衛で、それ共露知らず介抱するうちに懐中の金子に手を觸れ借用申込む。折悪く雨降りの闇夜、その上に兵助は盲で藤兵衛は導きて兩方の心が通ぜず、遂に兵助は藤兵衛に殺害されて金を奪はれる。

x
x
x
x



鷗山古跡松

中將姫雪責の段

中將姫は當麻寺縁起物として、謡曲に古く「雲雀山」の曲が行はれてゐるが、淨曲でも元祿九年四月竹本座上演の「當麻中將姫」(作者不詳)があり、その改作が並木宗輔の「鷗山姫捨松」(元文五年二月豊竹座上演)で、その中でも名高いのがこの三段目の切雪責の段で、のち寛政九年二月道頓堀東の芝居で「中將姫古跡松」の外題で、の三段目を出した事もあり、今日まで外題は一定してゐない。

大貳廣嗣は、豊成の館に観音像を早く差出せと催促に來たのだつた。廣嗣は勿論岩根の

鷓鴣山古跡松

中將姫雪責の段

竹本伊達太夫
豊澤仙 糸

胡弓 嶋澤寛 弘

岩根御前 吉田光造

大貳廣次 吉田玉徳

中將 姫 吉田榮三郎

下僕 角内 吉田兵次

下僕 宅内 吉田多三郎

桐の谷 榎竹紋司

浮舟 桐竹紋昇

豊成 公 桐竹政龜

からくりを知つて居た。どうやら奸計が豊成に勘づかれたらしくもあり、この上は中將姫を亡きものにするのが岩根たちには得策だつた。

七日七夜の責め苦に面やつれした中將姫は雪の庭前に引き出された。廣嗣は言葉も荒々しく姫を責めたけれど、佛像紛失について白状する何物もなかつた。

その時、枝折戸の外へ駆けつけて来た桐ノ谷はこの場へ入つて、却つて姫を助ける邪覺になつては、さびさり氣を揉むのだったが、又も降りしきる大雪に姫の痛々しげな様子にたまり兼ね、自分の着て居る上着の一重をぬいで、切戸の中へ投げ入れた。

岩根はこれを見るより猶ほ苛だつて、自ら姫の髻をつかんで捻伏せ引き廻した。桐ノ谷はもう我慢が出来なかつた。枝折戸を破つて内へ駆け入つてこれを止めやうとした。此處へ奥から出て来たのは侍女浮舟だつた。浮舟は前々から岩根に肩を持つさ見せかけて居て、實は姫の力になつて居たのだ。岩根に代

つて姫を打つさ、姫はそのまゝ悶絶してしまつた。

これを見た廣嗣も岩根も流石に驚いて、そしらの顔をして立つて行つてしまつた。

あさに浮舟は姫を抱き起すさ、姫は眼を開いた、それは浮舟の教への通り、死んださ見せて居たのだつた。

人の來ぬ中さ、立ち上る折しも、待て暫しさ聲を掛けたのは父豊成公だつた。

豊成は姫を此處に置いては爲にならないさ悟つた。そしてあくまでも姫を死骸さして口をきくのだつた。

豊成は今日の岩根の仕打ちも知つて居た。

しかし、この場合上御一人の御安泰を計るためには、岩根に頼み込んで置かなければならなかつたのだ。それを思ひ、責め苛まれる我が子を、見殺しにする心の中の苦しさを、君のため、親のため、よくも艱難して呉れた、さ姫に血の涙を絞つたのであつた。

姫は桐ノ谷、浮舟兩人に伴はれて、雲雀山へさ難のがれて行くのだつた。

文樂座小史 (昭和十九年三月調査)

○竹 本座創立 (現今ヨリ二百五十九年以前)
貞享元年二月 (道頓堀西ノ芝居)

○文 樂座發祥 (現今ヨリ約百五十年前)
天明年間淡路ヨリ植村文樂軒大阪へ來ル

○第一次稻荷社内時代
文化八年ヨリ天保十三年ニ至ル

○西横堀新築地演時代
天保十四年ヨリ安政三年ニ至ル

○第二次稻荷社内時代
安政三年ヨリ明治四年ニ至ル

○松島千代崎橋時代
明治五年ヨリ明治十七年ニ至ル

○御靈神社内時代
明治十七年ヨリ明治四十二年ニ至ル

○松竹合名社繼承
明治四十二年三月植村家ヨリ繼承

○御靈文樂座燒失
大正十五年十一月二十九日

○隨時興行時代
昭和元年ヨリ昭和四年マテ道頓堀辨天座ヲ始
メ其他隨時興行

○四ツ橋文樂座創立
昭和四年十二月以來現在ニ至ル

開演毎に一方ならぬ御後援御來觀を 賜り厚く御禮申上ます

當文樂座は既に皆様御承知の通り我大阪に於ける郷土藝術、三位一体の人情
淨瑠璃の日本唯一の公演場でございます。

文樂座人形淨瑠璃は昔に大阪の誇りとする舞台藝術のみならず我日本に於
ける古典舞臺藝術の至寶として世界に誇るべきものであります。従つて開
演毎にこの大使命が全う出来ませうやう、皆様の御期待に背かぬ様、皆様に
御満足して頂けるやうと同一断絶の努力を致して居りますが尙御氣付きの
点は御客様の御聲として承りたく存じます。

貴重品は 各自にお持ち下さいませ、お座席をお立ちの時は御携帯を願ひます
お煙草は 一階、二階廊下に喫煙台を備へてありますからお煙草はぜひ此處で
お願ひを致します。お席にては御遠慮下さいませ。

お食事は 西側、階下に大食堂と喫茶室が御座ります。
お化粧とお水洗 殿方は西側の一階と二階に、御婦人は東側の一階と二階に
御座ります。

場内にて 寫眞撮影は絶対にお断り申上ます。
御休憩の間は 二階西側に大休憩所の設備が御座ります。御辨當御持参の御方
様は何卒御利用下さいませ。

出演者 病氣其他の事故にて出場不能の場合は乍勝手代役にて相勤めませう
者、右様御諒承を願ひ申上ます。

★お客様へ特にお願申上ます
物質不足の折柄、洵に恐れ入りますがお下駄履きのお客様は晴雨に不拘なるべ
く上草履を御持参下さいませ。特にお願ひ申上ます。

尚、靴、草履のお客様はそのまま入場して頂きますので至極便利でございます

松竹株式会社
支配人 大橋 照夫
文樂座

電話南 三〇三二
三七八八番
四七一八番

